

光の子

発行／社会福祉法人 光の子どもの家
 編集／光の子 編集委員会
 〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
 TEL／0480-72-3883
 振替／東京3-128022
 印刷／(株)ドモン企画



こんにちは！

召しにふさわしく歩け (エペソ・四・二)

理事長 福島 勲

ピリピ人への手紙一・二七には、キリストの福音にふさわしく生活しなさいとある。この文の表題と全く同じ内容である。

ただ生活すると歩けとを比べると、字面では前者はやや静的で後者は動的な感じがする。本年度の標語に定められたが、いずれにせよ前向きに進む積極性が望まれる。

人生を歩むという表現は、いろいろの面が考えられる。

家康の重荷を負って歩む姿から、考えながらの哲学者の歩み、凱旋將軍の堂々の歩み、民族問題で逃げ歩く難民など。

聖書のここでは召しにふさわしくという副詞句がついている。すたすたであれ、もそもそおずおず歩くにせよ、召しにふさわしく歩くことが求められている。

召しにふさわしい、福音にふさわしいといい、キリストの恵みの中で、罪のゆるされた者として、喜びの生活の中で、多くの重い責任を負っている。

もちろん神に対する責任であるが、具体的には内に自己に対して、外に隣人に対してである。説教をするということは楽なことではないが、それを実践することかといくづく感じる。

口先だけで福音を説いても、身体ごとの献身と実践がなければ面餅にも等しい。

野球だって本腰を入れて、球を打たなければ、手打ちになつて球は飛びようがない。ある解説者が手打ちのよいのは、うんとそばだと巧みに評していた。

口先だけの理論は、イエスの最も嫌いな学者パリサイ人にまかせておけばよい。

真にキリストに生きる者は、真実な愛の奉仕に生きねばならない。

ヒルティの「眠られぬ夜のため」を読むと、この人は、キリスト教の真髄を神学や教会には求めないで、一人一人が与えられる精霊の働きによって、神に

心が見えるか

施設長 今関 公雄

近づき、神の言葉を宿し、愛の真実に生きることを主張する。独断に陥る危険性がないではないが、キリスト教が、教えにとどまることなく、教えに生きることを、それによって歩むことの大切さを知らされる。

奈良の法華寺にカラ風呂がある。ここに光明皇后の施浴の図の額がかかっているそうである。(和辻哲郎・古寺巡礼) 天平時代、蒸し風呂が諸病療法の一つであつてお寺が奉仕して多くの病人が入浴したのだろう。

仏門に入られた光明皇后が癩病患者の膿を吸い取ったという伝説がある。史実なら大変のことだつた。その行為で信仰の真実を問われて、高貴の方の心は揺れ、激しい葛藤があつたことと思う。他山の石である。

他人のために、良いことをするのはキリスト者だけといった、思い上がりは許されない。我々は常に罪許された者としての行為を自覚しなければならぬ。我が施設も様々な心の病いの子どもたちのよき湯治場でありたい。キリストの愛に温められた働手の奉仕によって。

五月七日、広島高等裁判所岡山支部で行われた「養護施設Z園リンチ殺人事件」控訴審の公判廷に、原告側の要請を受けて証言台に立ち尋問を受けました。

事件は、岡山市立乙養護施設で当時7才S子が同施設の子どもに集団暴行を受け、後頭部打撲により一九八二年八月死に至つたものです。

裁判では、宿直職員二名の事故の予見義務違反、指導注意義務違反、保護義務違反と、施設長の指揮監督上の過失をめぐって争われております。

岡山地裁の一審判決は、不十分ながらも宿直者二名の存在や加害児への口頭注意、育成記録などが考慮され、打ちどころが悪く不運な、「偶発事故」と認め、可視的部分への形式的な判断で過失を問わない原告全面敗訴となり、S子の母の原告が上告していったものである。

関係資料を精査し、事件の全を把握するに及んで、一審判決

は児童福祉の前進を妨げるものであることに気づきました。つまり、真の原因が明らかにされていないのです。

S子は、同年三月入所、五月頃から他児の悪戯が目立ち始め、虐めが増大し、七月頃には高年齢児も加わり集団化・暴力化へとエスカレートし、最後は夜と朝に連続して九才十三才の女児五名と十四才の男児一名によって集団暴行を受け、タンスの角で後頭部を打ち、五日後に死に至つたものです。

加害児の供述によると、S子が自分たちの「悪口を言い、馬鹿にした」ので、詰問しつつ仕返しをした、ということ。不備な育成記録を何回も検分し、夜七時半、翌朝八時半まで四十一名の児童に対して、宿直が不慣れた二人の職員で、手薄になる就寝前と起床後の二度にわたる暴行が直接的要因であることが解りました。

このような事件が起きるまで

放置されていた施設の養育体制の不備こそが真因なのです。

職員に子どもたちの「心の風景」が見えていない結果の事件と考えます。虐められた子は勿論、虐めた子たちの表情や心の状況への共感、それへの思いやりが決定的に欠けていたのです。そのような貧しい状態へのスケープゴードを出してしまう不健康な集団生活への痛みの共有がないのです。これらが少しでもあれば、職員に逃げ込んで難を逃れる当たり前の手段もとれた。S子からの危機を知らせるサインももつと直接的に発することでもできただろうし、それを感知して適切な対応が出来たであろう。生活を共にし、人間性を尊重する集団を形成し、それが無いことへの代償行為である虐めや暴力は克服できるのです。加害児も被害児です。「こんなに暗く冷たい暮らしをさせて誠に申し訳ない」という、悔い改めなしに、S子の霊を弔えず、加害児の心の傷も癒せません。何よりも「心の風景」が見える働きこそが、福祉施設や働く者に求められるのです。

遊びの意味

エッセイ

中島 睦雄(県立高校教諭)

子どもの頃からの友だち四・

五人で、何やかやと話している時、ふと表情を変えたトクちゃんと言った。「俺さあ。ムツさんへ遊びに行つてね、本を

読んでみたのがさあ、おれにとつて、すごく意味があつたと思ふんだよな。剣道の防具で遊んだらさあ。」私はすかさず言った。「俺は俺で、又同様に・

・。」と言いかけた時、何かがあつて、話は途切れてしまった。私には、トクちゃんあの一言が心に残つた。「俺にとつて、すごく意味があつたと思ふんだ。」その言葉である。

我々は、昔の友だちに会ふと、必ず昔話をする。子どもの頃の思い出話である。そして、子どもの頃、お互いに共有した喜びや悲しみをもう一度心に蘇らせて、昔を懐かしむのである。あのころは良かったなあ、あのころは楽しかった、あのころは苦しかった。あのころは・。しかし、たいていの場合、話はそこまでののである。みんな、懐

かしいのである。そして、その懐かしさがどうしたと言ふことは語れないのが普通である。

「それらのことが、自分にとってどのような意味をもつていたか。」この言葉をきつかけにして、私は途切れてしまったトクちゃんとの会話を、自分の心のなかで続けていきかけた。

私の子どもの頃は、戦争中であり、時代そのものが貧しかった。しかし、子どもには子どもの世界がある。戦争による陰はぬぐい去ることは出来なかつたにしても、私たちは、自分の生まれ育つた小さな地域のなかで、工夫をしながらよく遊んだ。

演習ごつごつという遊びがあつた。演習と言うのは、たぶん軍隊の演習という意味だつたが、ごつごつであるから、子どもの遊びである。上級生から、今夜タカタカをもつて加藤さんちの前へ集まれ、という召集がある。ご飯を食べるのもどかしく、タカタカを持つて出かけるので

ある。タカタカというのは、二米位の長さの青竹を切り、それを二〇位の所にナタを入れて縦

に割り、半分位の所で止めたもので、これを股にはさんで上下に激しく動かすと、割られた竹がタカタカと音をたてるのである。

我々にはこれが鉄砲の代わりで、唯一の武器である。敵味方に分かれた二つの隊は、正面から遭遇するとそれまで音をひそませていたタカタカを一斉に鳴らして戦うのである。そして

一しきり戦うと又、屋敷林の中から畑へ、畑から別の屋敷林へ駆けめぐつて、夜の闇のなかを行ったり来たりするのである。

大将は、常に部下を統率し、一年生ぐらいの子でも大事にし、虐めたりは決してしなかつた。又、農閑期には、大人たちはむしろを編んでいた。俵を編んでいる人もいた。私たちは五・

六人でたむろして、むしろ編みの大人の周囲を取り巻いて、軍隊から帰ってきた人の、戦場の話を聞いたりした。大人たちは、作業をしながら退屈しのぎにいろいろな話をしてくれた。中には嘘っぽい話もあったが子ども

は興味をもつて聞いたものだ。

夏には天王様があつた。神輿である。この天王様の伝統的な仕組みには、矛盾が多く、最後に賽銭や寄付金などを分けるのだが、その配分率は圧倒的に上級生に厚く、下級生に薄かつた。それでも、炎天の中、目眩しうになるのを堪え、集団の中に必死でついて行つたものだ。

子どもたちの世界は、大人が表面から見ただけでは解らない複雑な人間関係でつながっている。その中で、小さいながらも自分がその集団の中で、どう生きて行くべきかを苦しみながら模索しているのである。そして、それがとりも直さず子どもの成長につながるものなのである。

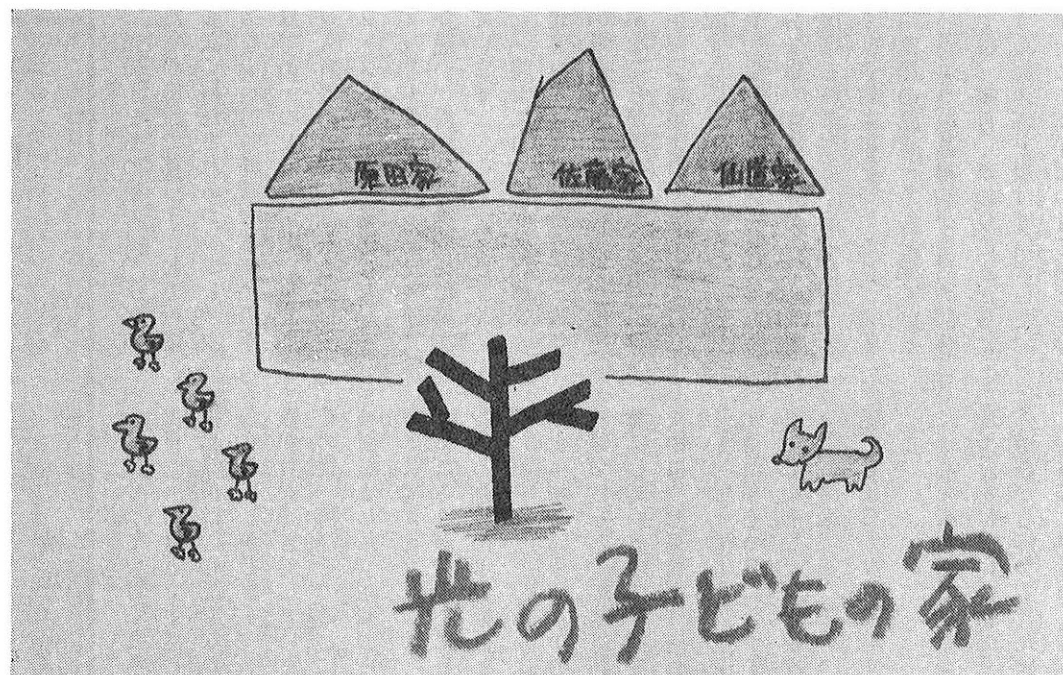
私たちは、地域の大勢の子どもの中で揉まれ、地域の大人たちに無意識的にも教育を受け、近くの川の流れや砂ぼこりの影響を受けて育つてきた。あの頃、みんないろいろな所で遊んだことが、自分にとつてどのような意味を持っていたのだろうか。酒でも飲みながらトクちゃんたちと、ゆつくり語り合いたいと思つていた。

子どもたちの季節

仙道家

この春、病氣とは関係の無いような岩崎保母が、一か月間病氣入院しました。岩崎保母担当の末っ子の萌季はショックでメソメソ。・加津子や寛も不安定な生活や表情に現れます。中学生の匠もみんなの手前泣くことは出来ませんが、いつもと様子が違い、少々のことではイライラしては他の子に八つ当たり。・それも当然で、開設以来の働きの友である彼女は、公休や休暇以外家を空けたことは一日もなかったのですから。・働頭の岩崎保母の抜けた仙道家は毎日テンテコ舞い。・と、覚悟をしていましたが。・泣いていた萌季が、「倉ちゃん、何かお手伝いはない?」としばしば聞いてくれるようになり、加津子は夕食の後片づけを一人で引き受け、小さい子の面倒も見えてくれます。いつもだらしない寛は、自分のことは自分でと張り切り、勿論、匠も部活や学習に追われながら、頼んだことは快く、そして確実にやってくれました。そんな雰囲気は淑子グループや私の担当の子どもたちにも伝わります。病氣の担当者のカバールをしなければならぬ私の方が子どもたちに助けられた一ヶ月でした。

担当者がいつも側にいると、つい余計なことまで手を出してしまい、それをまた子どもも期待する、という具合で、私たちが子どもの自立を、妨げたり機会を奪ってしまっているようです。本当はこんなに何でも出来るように育っている子どもたちなのですから。幼児の時に入所して生活してきた子どもたちも、成長し思春期を迎えようとしています。そして、担当者の手から離れ、自立へのエネルギーや思いがしっかりと芽生えていることを確認させられます。そんな子どもたちの自立をこそ願い、手助けのできる担当者でいなければならぬと思います。勿論、疲れたら安らぎ、甘えられる関係を創り続けながら、そろそろ私たちが子離れしなければならない時期のようです。倉沢智子



原田家日記

風が梅雨を輝かせる季節になりました。いかがお過ごしでしょう。光の子どもの家では、年度の初めに「今年度もがんばろう会」という集まりをしています。

今年度も年齢を横割りにしたグループごとに、子どもたちが各々ががんばることを発表し決意と約束を表しました。

「剣道をがんばります」「算数をがんばります」「自転車に乗れるようにがんばります」

実際に子どもたちはよくがんばります。こうやって発表したことをきちんと成し遂げるのですから。

夫、そして職員が発表する番もくるのです。職員はがんばらなくてはならないことは、たくさんありますから、考えなくてもダイジョーブなのです。どれを言おうか選ぶのが大変なのです。私もどれにしようかな、と思いつめがらせていると、高雄くんが「ほら、ゆう子さん、あれにしないあれ」と意味あり気ないうのです。

「なに? なあに?」と聞くと「ほら、おこらないようにがんばること」と高雄くんはにっこり。

「ゆう子さん、おこるとかつこいい」と言っていた、環くんも、最近では、「おこるとカツコワルイ」と言うようになりましたし、起こらないように、もう努力しなきゃいけない段階である。ちとシヤクだなー、と思いつつ、

おこらないようにがんばりまーす。それから間もないある日、一志くんが言いました。

「ゆう子さんウソついてるーおこらないようにがんばりますって言ったのに、さつきおこったじゃんー」「そうだーそうだー」と涙子ちゃんも。「そうだーそうだー」と高雄くんも。・私を責めたてます。言い訳の一つも出来ません。完敗です。

子どもたちはよく見えています。子どもたちの視線、子どもたちの頑張りに、負けないように、今年度も進んで行こう!

まなざし……

佐藤家

ひと月前には、ピンク色の花びらできれいに着飾っていた庭の桜の木が、鮮やかな緑色の葉を誇る季節となりました。新学期を迎えてから1ヵ月。たくさんさんの期待と不安を抱えての新しい学校生活にも、そろそろ慣れてきた頃でしょう。今朝も登校前、子どもたちが剣道の素振りをする元気な掛け声が、朝食の支度をしている私の耳に届いてきています。

3年生の拓郎君も、剣道を習い始めて今年で2年目になりました。元氣印の男の子で、体を動かすことが大好きです。週に2回の剣友会の日、拓郎君が思い切り自分を表現することのできる、とても楽しみにしている日です。

5月の月例試合の日。「今日は絶対優勝してくるからね。」と言って、拓郎君は張り切って家を出掛けました。私も妹の美鈴ちゃんを連れて応援に行きました。その声援に応えるように、1試合、2試合と勝ち進み、3回戦。力の限り相手に向かって行ったのですが、惜しくも負けてしまいました。面を取った拓郎君の目には、涙が溢れていました。試合を見ていた中学生が「よく頑張ったぞ」と声を掛けてくれるのですが、それでも止まらない涙を、拓郎君は一生懸命に拭っていました。

拓郎君の夢は、中学の憧れの先輩のように強くなって、同じ高校へ行くことだそうです。まだまだ先の話ですが、夢に少しずつでも近づいていけるように願っています。

素振りの声がやみました。もうすぐ息を弾ませて、子どもたちが帰ってきます。今日1日もガンバレっ!と、心の中で精一杯の声援を送ります。

石毛 照子

育ちゆく子らと七

秋元 光代

光の子どもの家では、子どもたちが施設で暮らすことで否応もなく持たされるコンプレックスを少しでも軽減するための手立ての一つとして、習い事を取り入れていきます。剣友会・ピアノ・スイミング・書道など、それぞれに数名ずつの子どもたちが通い、得意分野の開拓に努めています。

「將士にも、何か習い事をさせてみてはどうだろう」。去年の夏が過ぎた頃、職員会議でそんなことが話されました。二年生だった將士は、学習面では心配することもなく、得意の図工や、生き物への興味といった部分では、学校で十分に実力を発揮していました。その反面、きまりや約束事を守ったり、先生や友達の話をしきりと聞く、というような基本的な生活の部分では、毎日、まわりの人たちにうんと迷惑を掛けていました。將士にも何か習わせてあげたいけれど、今の様子で、みんなと

一緒にやっていけるだろうか。毎日、一番身近で生活している担当保母は、心配でなかなか決心することができず、そのまま数か月が過ぎてしまいました。その後、再びそのことについて検討しました。相変わらず決心のつかない私でしたが、心配もあるだろうが、將士にとってはむしろ訓練のよい機会として、

習い事をさせてみたらよいのではないかと何人かの意見に勇気づけられ、結局は將士の得意にしている絵の才能を伸ばすために、絵画教室に通わせようということになりました。私もすっかりその気になって、絵の具のセツトなど、必要な道具を一揃い用意して、さて、どこへ通わせようかなどと考えていました。

そんなある日の夕方、部屋で片付けをしていた私のところへ、外遊びから帰ってきた將士が来て、耳元に囁きました。「光代さん、いいこと教えてあげよう

か。明日からぼくも（剣道の）素振りをするの」。日頃、外で駆け回るよりは、部屋で本を読んだり、おもちゃで遊んだりすることが好きな將士の、この唐突な言葉に内心驚きました。毎朝、剣道を習っている友達が素振りをしているのを窓から眺めているうちに、自分でもやりたくなったのでしょうか。

次の日から、他の友達に混じって、素振りを一生懸命に頑張る將士の姿が、毎朝見られるようになりました。

それから、さらに数日経ったある日、將士と仲良しの、一歳年下の高雄君が「ぼく、二年生になったら、將士君と一緒に剣道習うんだ」と、みんなに話しているのを耳にしました。もちろん、將士からはそんな話は何も聞いていません。隣の家の保母さんからは、「將士は剣道を習うんですか」と尋ねられます。本人に聞いてみると「剣道なんかやらないよ」というのですが、私以外の人には、剣道を習うようなことを言っているようです。指導員に確かめてもらうと、やはり剣道を習いたいということ

です。

このことで、またもや私は迷い始めてしまいました。幼い頃、うまく歩けなくて転ぶことが多かった將士。三歳の誕生日が過ぎても上手に歩くことができなかった將士。今でも決してバランスがとれているとは言えない体の動き……。習い事は楽しみながらさせてあげたい。スポーツは、將士には辛いだけではないだろうか。私の心配は募るばかりでしたが、その間も將士は毎朝素振りに励んでいました。

そろそろ三月も終わろうとする頃、この件について、三たび検討しました。「好きな絵は、この先いくらでも描くことができる。しかし、將士が苦手な運動に興味を示し、自分からやりたいと思うことは、そんなにはないだろう。このチャンスを生かしてあげよう。」

こうして、將士は四月から剣友会の一員となりました。先生の指示を聞かず、叱られることもありますが、そんな中から、將士にとって必要なへちからを養っていつて欲しいと、今、願ってやみません。

責任

養護メモ 34

菅原 哲男

養護施設光の子どもの家は、誰からも、ともに生きることを拒否された子どもたちを、人間としてその尊厳を守り、さらにそれを高め創りあげていく社会的な、人格的な責任を果たすことを願って建てられた。

光の子どもの家で生活している子どもたちの二〇%が乳児院から来ている。彼らの殆どは両親あるいは片親の顔や姿を知らないで現在に至っている。

親の顔を知らない子どもがいるということとは、戦争や大規模な天変地異などを経験しないで約半世紀が過ぎようとしているこの国では異常なことである。

事情があつて離婚を余儀なくされる夫婦が、最初に突き当たり、最後まで引きずる大きなそして深刻な問題は、子どもの帰属をめぐる合意や、その後の関わりをどうするのかなどである。そのことをテーマにしたことが書かれたり、ドラマにされたりもしている。

親子の間に横たわる、とてもめんどろでマカ不思議なものがその「関係」なのである。

親が子どもを生んだという事実が保っている内実は、とても筆舌に尽くされるようなモノではなく、特に情緒的なつながりは断ち難いものを感じるのである。感情の動物たる所以である。

昔からそれほど子どもが大切にされてきた訳ではなく、死んでもすぐ代わりの子どもが生まれると考えられ、死んだ子どもと同じ名前が次に生まれた子どもにつけられ、お葬式に親が立ち会うことも希で、子どもはかけがえない存在ではなく、代替可能なものとされていた。現在のような子どもの位置が確保され親子関係が形成されたのは十七世紀以降だという（フィリップ・アリエス「子どもの誕生」（みすず書房））という説もあるが、それはともかく、基本的な人権や人間の尊厳が確認されている現代に生きるものとしての親子

関係についてみると、親の顔を知らないという子どもの状況はやはり尋常ではない。

ところで、親に抱かれたことはあるか、顔さえ知らない子どもにも、人間関係がかけがえのないものであることを伝えるには、具体的にかけがえのない関わりを経験させる以外に方法はないところ、週四四時間から四〇時間労働体制が関係官庁から指示されている。週休に有給休暇を確保するには、ほぼ三分の一の日数を休みにしなければならぬ。この四月中旬から七月の上旬までに八日間の連休を含め、約三〇日余の休みを組み込んで試みている。「休むことが、子どもたちにとっても豊かになれるような心を配って」と祈りに似た思いを込めながら。

どだいこの仕事は、企業や工場労働と同じ労働法規でくくられていることは乱暴なことなのだが、職員に休みなどの条件を手厚くすると、子どもが寂しい思いなどの不利益を受けるといふ二律背反の状況は避け難い。この二律背反を超えて、人としてのかけがえのなさを伝える

ことが、養護施設の基本的な責任の一つだとすれば、それはどうすれば可能なだろう。

養育する保母がひとりを受け持つ子どもの人数を減らすことであると考へ、現在最大五名、最小二名を保母一人当たりの担当数にしている。これ以上少なくしても関わりの濃度は上がらないと、最近思っている。

五月末、学校からの教師の家庭訪問があつた。そのとき、数名の保母が連休に入っていた。連休でない保母には後で学校に行ってもらって担任と話し合い、補うことを考えていた。

中学二年の先生がお見えになった時、休んでいたはずの竹花保母が出てきて場に加わった。五年生の先生の家庭訪問の日、約束の時間を少し遅れてドアをあけると、休暇先の横浜の実家から岩崎保母が、千葉からは石毛保母が駆けつけて、先生に対応していた。

「先生とは後で学校でお話を伺おうと思つたんですが、先生がお見えになった時、家族代わりの筈の私が居ないと子どもが寂しいだろうと思つて……」

日誌抄

二月一日
四月三十日

二月一日 来年度のクラス編成で、同じ家の同じ学年の子どもが同じクラスにならないように幼稚園、小学校へ説明し、ご配慮とご協力をお願いする。
○栗原忠さん今月も定番のお励まし。ありがとうございます。
二日 第二五回理事会。
七日 法人設立事業開設準備当初から適切なご指導やご尽力いただいた加須市の竹山誠一氏ご召天。心から哀悼の意を。
十一日 北川辺少年剣道大会。
黒川準優勝、安田四位入賞。
○小舎制養育研究会調査研究委員会を当所で。久しぶりの岩崎美枝子さんや、太田、北島先生が遅くまで。
十七日 日本キリスト教団桐生教会の白川牧師と役員の方々が見学とお励ましに。
十八日 大利根町内の小林辰蔵氏より餅米をたくさん。感謝。
二二日 愛知県児童相談所。矢萬田、彦坂福祉司一夜交歓。
二五日 六才の下田一志の父二年半ぶりに来訪。感激の一日。

○開設準備以来六年間無欠勤の岩崎保母が胃潰瘍で入院。
二七日 中島勇介氏来訪。
○剣友会月例試合。佐藤、優勝。
二八日 上智大学大塚教授来訪。
三月一日 東洋英和女学院短大 大島助教教授来訪。
五日 江森ヘヤーサロンの店主 毎月の散髪ご奉仕。感謝。
十一日 三年前母親に引き取られた笹岡恵、三年生の今年二十日しか学校に来ないと児童相談所より報告。度々訪問していたが、調整して通学援助。
十四日 町内大塚次夫さんより 母狩のご招待。お励ましも。
十七日 四月に引き取られた塩野姉妹と両親が訪問。賑やか。
二三日 大利根藤幼稚園卒園式。四名卒園。乳児のようだった子どもたちが、入学準備もすつかり整って。先生方に感謝。
二五日 原道小学校卒業式。一名卒業。おめでとう！
○穴水祐介指導員就職実習。
二七日 岩崎保母快癒退院。
二八日 小・中学校修了式。
○今年度もがんばった会。
二九日 弘前学院聖愛高校宗教主任嶺氏、ルーテル神学大学

の内地留学を終え、最後の金曜夕礼拝ご奉仕。心をこめた一年間の素敵な説教に感謝。
三十日 剣友会月例会安田優勝。
三一日 中学剣道部、剣友会の指導に尽力の檜山真退任。
四月一日 穴水祐介指導員就任。
○今年度もがんばりなさいと栗原さんより。ありがとうございます。
三日 虹の会恒例の赤城登山。氷と雪に感動の一日。
○GOGO会古河の運動公園にオリエンテーリング。
○日本キリスト教団白岡教会CSのみなさん見学に。
五日 入進学を祝い今年度もがんばろう会と穴水指導員の歓迎会。楽しくそして真剣に。
八日 原道小学校に四名、大利根中学校に一名入学。
九日 大利根藤幼稚園進級式。三名が年長のバラ組に。
一四日 原田家お花見に。
十九日 町内稲葉さんより美味しい夏蜜柑を。感謝。
二二日 町内山野井さんより日用品をたくさん。ありがとうございます。
二九日 原田家の子どもたち東京青山の子どもの城へご招待され楽しい一日。(くら)

反射光

新しい年度を迎えて、早くも三ヶ月過ぎようと

しています○五月の子ども祭には、昨年に引き続き、アルトサックスの飯田洋司さんと久喜高校の音楽部の皆さん、それに竹下由布子さんが来てくださり、素晴らしい演奏と歌声を聞かせて下さいました。私たちの取り組みに力を貸してくださる仲間が一年ごとに確実に増えていることを、心から力強く感じています○中学三年生は、いよいよ受験までの最後の夏を迎えます。なかなか一直線に走ることができず、周囲をやきもきさせていますが、人生で最初の関門を何とか突破できることを願ひ、関わっています○今号の編集を不慣れな指導員が任されたために、発行が大変に遅くなつてしまい申し訳ありませんでした。ここを支援してくださいってある方々に、子どもたちの様子をよりよくお知らせするために、今後も工夫を凝らした紙面作りに努力していきますので、よろしくお願い致します。(なお)